

ジョルジュ・ベルナノスの

「ウィーヌ氏」における司祭の問題

天 羽 均

序

一九三一年に、「死せる教区」という題名のもとに書きはじめられ、何度かの中断ののちに、「ウィーヌ氏」となつて完成したのは一九四〇年五月であった。⁽¹⁾この作品は、そのままベルナノスの最後の小説作品となった。「ウィーヌ氏」の執筆期間中には、「ある犯罪」(一九三五)「悪夢」(一九三五、死後一九五〇出版)「田舎司祭の日記」(一九三六)「新ムーシエット物語」(一九三七)などの小説をはじめ、「月下の大墓地」(一九三八)「真実のスキヤンダル」(一九三九)「われらフランス人」(一九三九)などのポレミックな作品が書かれている。「辱しめられた子ら」(出版一九四九)に収められているものも一九三九年から一九四〇年にかけて書かれた。

1 執筆期間にかんしては、プレイアド版「ベルナノス、小説作品集」のミシユル・エステヴの註による。

2 このあとポレミックな作品をのぞけば一九四八年に「カルメル派修道女の対話」(シナリオ)を書いたのが、唯一の文学作品である。

なんども中断しては抽出しにしまわれたこの作品は、この間に書かれた他の作品の問題を含みつつ、ベルナノスの苦惱ともうみだされた。あいまいさ、難解さ、分裂をたびたび指摘されるこの小説の問題は、このような事情から、ベルナノス小説を解く重要なかぎを提供してくれる。

これまで二つの小論によって、「悪魔の陽の下に」(一九二二)、
「田舎司祭の日記」、
「新ムーシエット物語」にあらわれたベルナノス世界の問題として、反抗者の問題をみた。これらの小説の人物たち、ムーシエット、田舎司祭をとりまく人々、二人目のムーシエットたちに共通に示るされているのが反抗の姿勢でありベルナノスは、彼らと司祭の関係を描くことよつて、現代世界への証言をな

すとともに、現代世界に生きる道を見出そうとした。

「われわれが今ここで扱うのは、神学的問題ではなく、社会的問題なのだ」(LAA p.121)とはベルナノスが一貫してもっていた態度である。ベルナノスがつねに自己の作品を、戦争から生まれたものだとして、自分は証言することなしには死ねない、と書いていることは、我々が反抗者の問題から彼の小説世界へ近づくのを許してくれるであらう。

本論は「ウィーヌ氏」のいくつかの問題点を、先の二つの論文の延長において、とくにフヌイユの司祭の問題の中にとらえようとするものである。

ベルナノスの小説人物は、大きく三つのグループにわけられる。

最も重要なはいうまでもなく、司祭たちであり、この中にはドニサン、シヴヴァンス、田舎司祭、フヌイユの司祭、さらに、田舎司祭の同僚トルシィの主任司祭などを加えることができる。この司祭たちに対立する人物として、「悪魔の陽の下に」でわずかに姿をみせたサン・マランにはじまり、セナブル、ガンス、ウィーヌ氏とつづく欺瞞者あるいは、自己に絶望し、自己を憎悪する人々の群であり、「虚無に、信仰と力と、彼の生活を与えてしまった」人物である。

最後に、先にふれた反抗者たちがいる。

われわれがこれから検討するのは、この司祭と反抗者たちの世界である。

a. 反抗者の意味と発展——これまでの小論の要約のとして

ベルナノスの小説世界において、反抗は、ブルジョワ社会への反抗→人間の根源的条件への反抗→神への反抗、というかたちで、悪魔的な様相をおびて描かれた。ベルナノスは、この反抗を支える悪魔の世界の究極での敗北こそ救済であるという考え方によって、反抗者の救いへの道を考えようとした。彼の作品を強く特徴づける悪魔的雰囲気もこの最後の転換を目標としていることによって、マニ教的二元論をまぬかれている。

悪魔の敗北を、彼は悪魔の不毛性というかたちで立証しようとした。初期の反抗者たちが悪に身を賭けたのち見出したのは、自分たちを聖化してくれる悪魔の世界の存在ではなく、むしろ自己の否定に行くしかない袋小路にある自らの姿だった。ここに、ヒロイックな行動を悪の世界にむけ、その果てにおいて悪の創造すらなしえなかったムーシェット(「悪魔の陽の下に」)の自殺がある。閉ざされた世界にあつて、悪の行為の中に、日常的な生活のうちにヒロイックな行動を求めたこの最初の作品は、マルロー、サンテクジュベリが行動のうちに、人間の条件への対決をみたのと時期を接している。

「田舎司祭の日記」にいたつて、反抗は社会の不正に孤独な戦いをいどむデルバンド医師、死すべき人間の条件に、すなわちに神に反抗をいどむ伯爵夫人やシャンタルを描いて、「悪魔の陽の下に」における反抗のテーマを一步おしすすめた。

「田舎司祭の日記」では、これらの反抗者すなわち人間の条件への対決者のうちに救いの可能性を見ようとするとともに、裸で大地

に対し、そこに苦しむべき人間の条件をみる農民のうちに、ベルナノス特有の母のイメージを重ねあわせて、反抗者を大きくつつみこむ世界としている。

「悪魔の陽の下に」と「田舎司祭の日記」をへだてる兩大戦間の十年の時日は、反抗の状況を変えずにはおかなかった。「田舎司祭の日記」の反抗者には、「悪魔の陽の下に」のムーシエットにみられた行動のヒロイズムはもはや見られない。「田舎司祭の日記」では、魂のヒロイズムとしての反抗が問題となる。

ベルナノスが、マジョルカ島でみずから渦中になげこまれたスペイン内乱から生まれた「新ムーシエット物語」では、反抗の問題はさらに新しい局面をむかえる。マルローやヘミングウェイが義勇軍に参加し、行動の文学の記念碑をうちたてたとき、ベルナノスは、外部からの英雄的行動への参加者としてではなく、現地人の中で内乱に遭遇したのものとして、内乱を内側からみた。悪夢の本質をまのあたりにしたとき、内乱の中に生きる現地の人々から何が奪われるかを見逃がさなかった。マルローやヘミングウェイが、英雄的な行動のうちに何か空しさのにおいかざるとき、ベルナノスは、それら一切の行動を剥奪されたスペイン人たちの悲劇を描く。その様相は単にスペイン内乱にとどまらず、やがて第二次大戦を経て現代にいたる窒息させられた世界の様相でもある。

「新ムーシエット物語」で、ムーシエットは、自己の反抗をさえ奪われることになる。ムーシエットの自殺は、さきのムーシエット（「悪魔の陽の下に」）の憑かれたような自殺ともことになって、ほとんどその意識すらなく沼の中に吸いこまれていくものである。

われわれは彼女のこの死にどのような意味を与えることができる。それはむしろ死の意味の剥奪であり、死に新しい生への契機を求めベルナノスにとっては、救いへの道とぞしてしまった現代の悲劇性に他ならない。

なおこの主人公ムーシエットが、今までのブルジョワ社会の枠のなかの反抗者ではなく、作者がこれまで、人間の根源的条件に裸で直面している最後の人々として考えていた農民たちの一人あることは、ベルナノスの世界にとって新たな問題と言わねばならない。反抗はもはや今までのようなヒロイズムのあらわれではなく、現代世界で自己の生をまもろうとする者のぎりぎりの状況での行動の倫理として描かれている。このような意味での反抗が窒息させられる状況が、この小説の世界であり、自己の存在の否定も世界の不条理さへの挑戦とはなりえない。

「悪魔の陽の下に」、「田舎司祭の日記」で、反抗者たちを、人間の条件とむきあわせ、人類の太古からの原罪に苦しむ姿をさし示すのはベルナノスの司祭たちである。そしておそらく、この司祭たちこそ、孤独な者の絶望的な戦いを人類共通の戦いにくみなおす現代の騎士であろうとした姿だろう。だがこの問題の前には、「新ムーシエット物語」での司祭の不在、「ウィーヌ氏」におけるフヌイユの司祭の位置の問題がたちふさがる。

b. 司祭と反抗者たち

ここでわれわれは、ベルナノスのうみだした最も重要な人物である司祭について、いくつかの特徴と問題を検討してみよう。

一、実践者としての司祭 司祭とは、いうまでもなく、教会組織

の最末端として、教区民と直接ふれあうものである。このような位置が、カトリック作家としてのベルナノスにとっては、大きな意味をもった。それを特徴づけるのは実践者としての地位である。

ベルナノスは、自分がカトリック者として聖職者にならず小説家となったことについて次のように述べている。「もし私が司祭になる意志がないとするなら、それは第一に私は自分がそれを天職として与えられていないように思うからであり、さらに、俗界の人間としての方が、聖職者が多くをなしえないいろいろな領域において戦うことができるからである。」

(1) 'Lettres Bresiliennes' Bulletin de la Societe des amis de Georges Bernanos V. p. 8—L'expression de la passion interieure dans le style de Bernanos romancier (par Pierre Maubrey) p. 1よりの再引用

これはそのまま、実践者としての司祭を選ぶ態度にも通じる。彼は「田舎司祭の日記」の中で、たびたび司祭と修道士を比較している。「修道士は内的生活の比類ない師だ、誰もそれを疑いはしない、しかし、これらの有名な行為のほとんどは、地酒のようなものだ、その場で味わなければならない。輸送には耐えないのだ。」(JCC p. 1034)個人の内的生活に関する行為でなく、輸送にたえる普遍的なものを求めた。「神秘の百合は、野原の百合とはちがうのだ。それに、もし人間がつるにちちそうの花束より、ヒレ肉の方を好むとしたら、それは彼自身けものであり、腹だからだ。」

(JCC p. 1040) これが教区民の間で動きまわる司祭を選ぶ理由である。

(小説作品の引用は、プレイアッド版による。)

このことから当然、教区と司祭の関係が重要なものとなる。「田舎司祭の日記」の自分の教区を前にしてのアンブリカールの司祭のモノローグの場景は、そのもつともすぐれた表現となった。ベルナノスの司祭たちは、つねに彼の教区との現代において失なわれた関係を回復しようとする。「私は村をみつめる、だが村が私を見つめているとは決して思えない。しかも村が私を知らないのだとは思えない。村が私に背をむけ横目で、猫のようにうす目をあけてうかがっているといつてもいいだろう。」

村は私に何を望んでいるのだろう。一体何かをでも望んでいるのだろうか。「私が何をなさそうと、たとえ私が自分の血の最後の一滴まで村に与えたとところで、(そして時おり私は村が私を十字架にかけ、少なくとも私が死ぬのをだけは見つめているという情景を想像する)私は村を所有しないだろう。」(JCC pp. 1060~1061)これが司祭の条件ともいうべき教区、あるいは教区民との関係の現実の姿である。ベルナノスの司祭たちに深くさまざまれている孤独の根源は、司祭のこのような教区との失なわれた関係に由来している。

一方、司祭の教区での実践者としての性格を特徴づけるものに、教会あるいは彼の上長たち、同僚たちとの関係がある。

「教会は実現すべき理想ではなく、現実中存在するものである。」というとき、ベルナノスは教会の組織、秩序といった制度よりむしろ

ろ、教区で司祭が働くことがそのまま教会としての仕事であるという点を重視する。これは現代の教会、とくにのちにスペインのフランコを支持することになるスペイン教会などに対する、激しい非難と深い懐疑をあらわしている。「教会は、すべての正規な補給が不可能な未知の土地を通じて進む兵隊の一団のように、時間を通して進む。教会は、軍隊がその日その日、現地民にたよって行くように、うつりかわる制度や、社会によって生きてゆく。」(JCC P. 1104)

彼が非難するのは、民衆との接触を失なった教会であり、クリスチャニズムである。この非難は、鋭く教会の内部で安寧をむさぼっている上長たちにもむけられる。「わかろうとしてはならない」とくりかえす現実回避の同僚たちの立場にはげしく反撥する。

二、司祭の孤独 右にみたようなベルナノスの司祭の位置から、司祭の孤独という性格は充分に理解されるであろう。ここではベルナノスの司祭たちに深くきざまれている孤独の今一つのしるしについて注目しておく。

それは十字架上のキリストの苦惱であり、オリヴの園でのキリストの孤独である。他の人々の救いのために自らの生活をさしだしたものの苦惱である。

「私の背後には、あの日常の親しい生活はもはやなかった。いつでもそこへ帰ろうと思えば帰れるのだという確信を自己自身のうちにもちながら一気に逃れてきたという、そういった生活はなかった。私の背後には何もなかった。そしてわたしの前には壁が、くろい壁がある。(JCC p. 1111) 帰るべき日常生活をもたぬ召命者と

しての位置は、教区との失なわれた関係を前にした司祭をしばしば絶望におとし入れ、司祭の孤独をふかめる。

日常生活とのこのような関係は、司祭たちの日ごろの生活での無器用さ、へまさとおそらく無縁ではないだろう。ベルナノスの司祭たちは、ほとんど現実生活の能力をかいていない。しかも彼らは、現実生活を軽蔑しているのではなく、むしろそのような能力を渴望しさえしているのだからである。

さらに肉体的苦痛が司祭を特色づける。父祖の代からアルコール中毒の血統による胃病に悩む司祭たち。

孤独に苦しみ、絶望の誘惑とたたかう司祭こそ、教区民の孤独を理解し、わかちもつ存在として、ベルナノスが考えたものであった。

三、反抗者と司祭 現代の倦怠にむしばまれた教区にあって、反抗者こそ自己の生の意味の確認のために、身をなげだす存在であった。司祭とこのような反抗者の関係は、ベルナノスの司祭たちを大きく特徴づけているものの一つである。

「悪魔の陽の下に」でのムーシエットに対するドニサンは、ムーシエットがブルジョワ社会によって剝奪された犯罪を彼女のものとして認める。だが同時に彼は、彼女の犯罪―悪の追求に身をかける行為―も、数多くの祖先たちにみとめられるものであること、人類の太古以来の姿であることを啓示する。これは原罪として人間に根源的に課せられている状況の啓示でもあった。

ムーシエットがこの人間の根源的状況の啓示をもちやうけいれる

力をなくし、サタンのさしだす冷い平和をうけいれ自殺をはかったとき、ドニサンは自らの救いをかけて彼女を聖堂に運んだ。他人の救いのために、自らの救いと平安をなげだす司祭の姿がある。

反抗者の中に神の名を見、反抗者に人間の根源的条件を啓示するこの司祭の役割は、「田舎司祭の日記」にいたって、さらに、充分に検討され、深められる。

アンブリカールの司祭は、彼の対話者、デルバンド医師、シャンタル、伯爵夫人、ラヴィル医師や昔の同僚デュプレティの妻たちの孤独と苦しみをわかちもつ。さらに彼らの反抗をすらわかちもつ存在となる。

より特徴的なことは、このように孤独、苦惱、反抗をわかちもつだけでなく、伯爵夫人のように、すでに無関心の中で死んだ魂に、神への反抗をよびおこしさえすることである。

反抗の極においてはじめて人間の条件が啓示され、反抗者はこの条件と対決せられるからである。ベルナノスは、何をしても平安を求める現代世界の偽瞞の中で、反抗のうちに、救済への契機を見出そうとした。

この段階ではベルナノスは、反抗を人間の条件に直面するための一つの契機として考えているので、彼自身反抗者としての生き方を最終的なものとしているわけではない。

「私は反抗者などではない。この反抗者の名にふさわしい人は、公的生活におけると同様、私生活においても、まず彼のいる場所と、彼の時代によって課せられている特殊な諸条件を、誠実に、男らしくひきうけるべきだと私はかたく信じている。」(NAF, p. 32)

反抗の媒介者としての司祭が最もドラマチックに描かれたのが「田舎司祭の日記」であるが、その中には、土地とともに孤独の苦惱に耐える農民の姿がデュプレティの妻を通して語られていることも忘れてはならない。

司祭はまた単に、反抗を媒介として、人々を人間の条件に対決させるだけではなく、「ただわれわれはアダムの心の中の孤独の感覚を廃棄し、とりのぞくことができたかもしれない」というトルシイの主任司祭の言葉にも表われている孤独からの回復を指摘している。ブルジョワジーの極端に個人主義化した生活の中での孤独感をうちやぶること、それは再び個人を結びつけることであった。

この章でみたベルナノスの小説世界が、「ウィーヌ氏」にどのようなものとなってあらわれるか、特に「ウィーヌ氏」におけるフヌイユの司祭の位置について注目したい。

二

「ウィーヌ氏」が何度かの長いあるいは短い中断期間をおいて完成された作品であることは、その一九三一年から一九四〇年という期間が二十世紀における最も波乱にとんだ時期であることからも、非常に複雑な問題を提出しているように思われる。この期間中にいくつもの作品を生みだしたことは、この作品のプランに影響を与えずにはおかなかったであろうし、特にフヌイユの司祭と田舎司祭の關係、主人公ウィーヌ氏をとりまく世界の検討は重要な意味をもつ。

a. 「ウィーヌ氏」の世界

犯人も、その動機もわからぬ牛飼少年殺人事件がこの小説の中心である。明確に存在するのは雨の夜に発見された、明らかに絞殺されたとみられる牛飼の少年の死体だけである。この事件は、倦怠に沈んだ村に波紋をなげる。読者もフヌイユの村の人たちと同様、この事件について小説の世界から何か有効な手がかりをさがしだそうと努力しなければならず、最後まで小説世界に対してならん特権的視野を与えられることはない。

「ウィーヌ氏」の世界は、いくつかの人物群にわけられる。現代言語の老教授ウィーヌ氏はこのフヌイユの村に、ある侯爵夫人のいとこでありネレイスのやかたのあるじであるアンテルムに招かれてやってきた人物であり、その行動は、村人たちにとっても謎である。このウィーヌ氏と彼に魂をあずけんばかりにしている少年フィリップを中心とし、病床にあるアンテルム、アンテルムが旅先であい、つれ帰り妻にしたというリヨンの貧しい薬剤師の娘であったジネット（「よろよろ足」とあだ名されている）、それにフィリップの母親ミシェルや彼の女家庭教師ミス（と英語でよばれている）を外側にする世界。

村長アルセースと妻マルヴィナ、フヌイユの医師マレピヌの世界。ウージエヌとエレヌ、その父親およびエレヌの兄弟にあたり、またフィリップの友人でもあるびつ、このギョームの世界。これらの人物群の間にフヌイユの司祭が加わって「ウィーヌ氏」の世界が構成されている。

これらの人物群、そしてその背後にある教区は殺人事件によって結びあわされている。しかも、この人物群は、殺人事件によってし

か結ばれてはいない。殺人事件こそは、見せかけの平安を破り、村を分散させるものであるのだから、この否定的関係によってのみ結びつけられた小説世界とは何とくらい世界であろうか。

殺人事件そのものが、死体の存在を除いてすべて謎であるとすれば、これらの人物群の間にも、分裂があるばかりである。ベルナヌが最初この作品の題名として考えた「死せる教区」の世界が、この作品の背景であり、読者は難解さをもたらずこの分裂と、あいまいさの中に投げこまれる。

「田舎司祭の日記」においては、それぞれの人物が司祭との関係によって一つの小説世界にくみいれられていたのに対して、この小説でフヌイユの司祭は、わずかにウィーヌ氏と村長アルセースの世界に関係しているにすぎない。表題の示す中心人物ウィーヌ氏の生きるのは専ら閉鎖的な世界である。田舎司祭が教区民の魂の中に、「炬火を手にして」はいりこもうとしたのに対し、ウィーヌ氏は、教区の分解していくさま、その中の魂の動きを冷やかに観察している人物である。このような状況が「ウィーヌ氏」の中の各人物群の世界をたがい疎遠なものとしている。

ウージエヌとエレヌ、その父親の世界はフヌイユの司祭とも、ウィーヌ氏ともであろうことのない特異な世界をかたちづくっている。

1 ウージエヌとエレヌの狐番小屋での最後の章（十二章）が書かれたのが、一九三三年末とするなら、一九三七年フランコの反乱を目撃したとき「新ムーシエット物語」の世界を生んだ

ベルナノスの頭にうかんだのは、おそらくこの世界であろう。

ウィーヌ氏は、「悪魔の陽の下に」の最後にアナトール・マランをモデルにしたといわれるサン・マランを登場させている、ベルナノスの司祭たちの一つのアンチテイズとなった、自己の中に失なわれた生活を、知的好奇心と知的活動によってごまかし、愛の原理によって行動せず、冷やかな観察によって生きる人物の姿である。セナブルを中心とした「欺瞞」に登場するいくつかのタイプ、「悪夢」のガンスにおいて描かれた人物の頂点にウィーヌ氏があ

る。この作品で、このアンチテイズとしての人物に、フマイユの司祭が充分に対抗しえないことは大いに注目しなければならない。

b. フマイユの司祭

十六章のはじめまでを一九三四年に書き終えていたこの作品のフマイユの司祭は、田舎司祭とのいくつかの共通の特徴によって、(特にあとに述べる幼少時代の類似) 田舎司祭の重要な原型の一つであると考えられる。「ウィーヌ氏」を「田舎司祭の日記」と比較しようとするとき、各部分の執筆時期の厳密な検討とともに、一九四〇年に完成された作品としての比較検討も行わねばならぬという複雑な問題を生じる。執筆時期は、先にふれたミシェル・エステヴのブレイアド版への註によりほぼ判明するが、長い執筆期間中のプランの変更などを今ここに検討する余地はない。執筆時期から言って田舎司祭の原型となったであろうフマイユの司祭の問題も作品の世界との関係からみるととき一九四〇年にベルナノスが最後

の章を終えたときにはじめて完成したものととして検討をすすめたい。

われわれが「ウィーヌ」氏の中に見出す、フマイユの村と司祭の関係は、先の章でふれた「田舎司祭の日記」の村と司祭との関係と、きわめて類似している。この作品が最初に「死せる教区」と題されたことから、司祭と教区との関係が主要な問題になっていたことがわかる。

ウィーヌ氏と司祭の対比をしめす一つの対話。「村人たちはこのおだやかな村を、市に、縁日にしたのだ。あらゆる様相が、善も悪も、みにくい無秩序のうちにこったまぜにならべられるのだ。わたしはそんなことにがまんがならぬのだ。」というウィーヌ氏に対し「私はあらゆることに耐えねばなりません。他のことと同じようにこのことにも、ひとりぼっちであろうとなかろうと、耐えていくでしょう。」(M. OULINE, p. 1467)と答える。司祭は教区があつてはじめて存在するからであり、教区は司祭の条件だからである。だから「死せる教区」とは司祭にとつて「失われた教区」でもあつて、ベルナノスはこの「失なわれた教区」との関係の回復を「田舎司祭の日記」で試みた。

フマイユの司祭は、殺された牛飼の少年の埋葬の説教でこの関係について教区民に非難の調子をこめて語っている。

「あなた方は今朝、何を求めてここに來られたのです。あなた方の司祭に何を求められるのでしょうか。この死者への祈りでしょうか。しかしわたしはあなた方のために何もできない。わたしは私の教区なしには、何もできない。だのに私は教区をもつてはいない。

兄弟よ、もはや教区はないのです……ただ村（コミュニティ）と司祭があるばかりで、それはもはや教区ではないのです。」(ibid. p. 1484)

また、田舎司祭について注意した帰るべき日常生活をもたぬ、教区の中で生きるように使命を与えられた司祭の性格を次のように語っている。「われわれにはどのような場所もない。われわれは誰にも結びついていない。われわれは家族を離れ、家をはなれ、村をはなれた。そしてわれわれがノートや、本や、ギリシヤ語やラテン語をやり終えたとき何とかやっていけよ、うまくやるんだぞという一言をうけて、あなたがたの間におくりかえされたのです。」(ibid. p. 1486)

このような司祭の条件は前の章にみた実践者としての司祭を現代の世界において教区の中で孤独な存在として特徴づけるものである。教会組織の一員としてではなく、わが身を教会として実現しようとするのがベルナノスの司祭における実践の問題なのだ。ベルナノスの司祭が十字架上のキリストの苦悩をわけもつ存在としてさきに見た孤独は、フヌイユの司祭の場合にも、すでに司祭の条件として課せられているとわいていい。

「私はいまやかつてないほど孤独です……こういわれるでしょう、上の人たちがいる、それに同僚たちがと……ああ、でも司祭はど他の司祭と違うものはないのです。われわれはすっかり孤独なのです。」(ibid. p. 1469)

ベルナノスの司祭の孤独な姿を特徴づけるものに彼らの苦しい、悲惨な幼少時代がある。司祭が教区民の苦悩や孤独を分かちもつ

は、この彼自身の幼少時代の記憶によってである。幼少時代はまた、司祭のみならず、ベルナノスの人物たちの共通の特色である。

フヌイユの司祭の父は、ランの鉱夫であり、彼が生まれる二ヶ月前に鉱山の中で死んだ。母もまもなく後をおっている。彼自身はノランフォントの居酒屋の女主人であるおばさんに育てられる。

「ああ、今でも酔っぱらった男の顔がこわいのです。といつてもわたしは、けがれなど知らぬというのではないのです。私は悪は知っています。子供たちが、遊びや、笑いや、唄でしかないような年頃に、もうわたしは、何ものも悪と妥協することはできないし、正義と不正は二つの別々の世界だということを感じていたので。」(ibid. p. 1468)

これはほとんどそのまま田舎司祭の幼少時代となる。「父が死んだ年、母は腫物の手術うけなければならなくて、ベルゲットの病院に四、五ヶ月入院していた。私をひきとってくれたのはおばだ。おばさんはランのすぐ近くで酒場をやっていた。板ばりのひどいバラックで、よそへ、つまり本もののカフェへなど行けぬほど貧しい鉱夫たちにジンを売っていた。学校は二キロばかりのところにあつて、私はカウンターのうしろの板に腰かけて勉強していた。」(JCC p. 1069)

貧しさを通りこして悲惨ともいふべき状況のもとに、みじめな酔客の尿のおいと、卑猥な言葉の中で彼らは幼少時代を送っている。この貧しい鉱山地帯での思い出が、司祭たちに農民の苦しい孤独な生活を理解させることになる。

このように、ベルナノスの司祭の特徴を共有したフヌイユの司祭

が、小説世界での位置が副人物にすぎぬという意味ではなく、ウィーヌ氏に対抗できるひとつのアンチテーゼとなりえなかつた点について検討しなければならない。

このことは「欺瞞」の主人公セナブルに対し、シユヴァンスがわずかに登場しながら、セナブルに大きな影響を与えた人物となつたことを考えあわせれば、注目すべき問題と言わねばならない。

三

「わたしはあなた方のなかにあつて何なのだろう。体の外で動いている心臓だ。」(M. OULIN, p. 1485) フヌイユの司祭のこの言葉は、教区から拒まれた存在としての司祭の位置をたくみにあらわしている。

ベルナノスの司祭に含まれているいくつかの問題——それらのあるものは、本論の一章においてみたが——を検討し、ベルナノスの小説世界の問題として考えてみよう。

a. 反抗の問題

「田舎司祭の日記」において展開されるドラマが、司祭と反抗者たちの間におこなわれるものであることをすでに見た。先の論文でみた「新ムーシエット物語」での反抗の窠息は、この小説における司祭の不在とは無関係ではないように思われる。それはウーシエヌとエレヌの世界がフヌイユの司祭と全くふれあうことのない世界であることもつながる。

「新ムーシエット物語」における司祭の不在は、小説の人物構成上、当然のことでありことさらに問題とするのは、むしろ不自然なこ

とだろう。だがベルナノスの読者にとっては、どうしても考えてみたくなる問題だ。

アルペール・ベガンは、この作品においては、主人公ムーシエットをながめる目が、司祭のそれであり、この物語を語る作者が司祭なのだという観方をしている。いかにベルナノスの司祭が彼の小説世界ときりはなせぬ存在かをこのみかたは示している。

ムーシエットがベルナノスによってつねに聖化される反抗者の一人であることから、このようなみかたもうなすける。作者と作中人物の関係からベガンのみかたが肯定されるとしても、作品に表われた世界を論ずる限り、ムーシエットの世界とベルナノスの司祭の間によこたわる溝にむしろ注意すべきではないか。

神の不在の世紀の中では、神への呪い、反抗をよびおこすことこそ、神の存在のあかしとなるはずのものであった。反抗し罪の究極における救いへの転換という図式がこのようにして考えられた。

だが両大戦をむかえた世界は、個人から反抗の目標すらとりあげた。個人の罪悪は、戦争という合法化された殺りく行為の前には、悪の痕跡すら地上にとどめられぬものになった。悪と不正を合法化しようとする世界が反抗者たちをのみこんでしまった。

ムーシエットの世界における反抗をすら剝奪された状況こそ、司祭が体の外の心臓とならざるをえなかつた理由なのではないか。「田舎司祭の日記」でみた人間の条件に直面するための契機としての、魂のヒロイズムのひとつのあらわれとしての反抗が、「新ムーシエット物語」では、より悪化した状況のもとでぎりぎりの行動の倫理となりながら、空しく闇の中にすいこまれてしまった悲劇であ

る。

犯人も、動機もわからぬ死体だけの存在する殺人事件、さまざまなせんさくのまじりあった無意味な混乱、アカデミーの委員や村長の追悼演説を用意した大騒ぎの埋葬、これらは現代において、死の意味と生の意味を喪失した世界の姿でもある。

一方、ベルナノスは、悪と不正を地上から追い払えると思える態度をオプティミズムとして退ける。彼にたびたびみられる社会改革への批判はこの観点からなされる。人間の条件として原罪を考える限り、悪を追放しようと考ええることはむしろ人間の条件を認めぬ態度、人間の条件の回避として考えられる。このようにして、ベルナノスは現代世界に対する有効な行動を見出せぬまま、自らは南米へ逃れることになる。

反抗という孤独な方法が、有効性を失なったとき、ベルナノスの司祭は世界に働きかけるすべを失なったのではないか。

b. 実践者としての司祭

一章でみた実践者としての司祭の位置は、現実世界に密着することにより、彼の作品をすぐれた現代世界への証言の書とした。彼が現代における聖人を描きえたと言われる理由でもある。この現実世界での実践者としての司祭の位置が、「死せる教区」の中で充分に働きえなかったことについては先の反抗の問題とあわせて考えてみる必要がある。

前に教会組織の最末端として現実と接触する司祭という位置をみるとともに、ベルナノスは、司祭を教会組織の一員と考えるよりむしろ自己のうちに教会を体現しようとする存在であることに注意し

た。それは、同僚や、上長たち、教会組織を考えぬ自らをキリストとなした立場であった。

このような司祭はまた、聖壇でたたかう戦士に比せられる。ベルナノス自身第一次大戦で聖壇の苦しいたたかいを経験している。聖壇でたたかう兵士とは第一戦にある者であり、目前と敵とだけ対している。彼には作戦計画は知らされず、参謀本部の存在はほとんど問題にならない。ベルナノスはさらにこの考えをおしすすめ、システムや原理の無視にまでむかっている。その場合攻撃されるのはつねにポリチック・レアリスト実政治家であり、それはさらに政治そのものの否定にむかう。現実政治の否定はさらに歴史の否定までおよぶ。近代国家の成立によって、国家の名を冠せられて、自らが現実であることを失なうて、現実政治の中に座をみつけたそうとした教会への抗議でもある。

彼のポレミストとしての活躍は多くこの点にむけられ、王党派、反動と色々のレッテルをはられるが、その激しい調子が、現実に対する鋭い抗議を含む一方、モナルシー・ポピュレール・フランセーズ (L.A.A.P. 34) といった時代不明の観念で読者を当惑させるのも、この現実密着の態度と、政治あるいは歴史否定にむかうという二つの態度のゆえであろう。

「田舎司祭の日記」の中で、トルシイの主任司祭は、デルバンド医師のような孤独な反抗者に悲劇をみとめ、これに対して正規の軍隊という考え方もってきた。正規の軍隊としての司祭が、孤独な反抗者たちの絶望的な戦い一つにしてくれるはずであった。だが正規の軍隊の一兵士の手には及ばぬまでに戦局が発展したとき、司祭

は死せる教区を宣するより他なかつたのではないか。

C. ディアローグ

さきに「ベルナノスにおける反抗者たち」において、「田舎司祭の日記」でのディアローグの重要性についてふれた。同じカトリック作家であるモリーリヤックが、伝統的な心理描写の方法で人間の魂の内部にはいりこもうとしたのに対し、ベルナノスは、むしろドラマをつくりだそうとし、ドラマの過程における魂の動きを描き、その頂点において救済のドラマを描きだそうとした。

このドラマで主要な役割を果すのが対話であり、対話者としての司祭である。ベルナノスの場合ディアローグは説得術ではなく、緊張をぎりぎりまでおしすすめたときに力関係が逆転し、それが対話者たちの間のドラマとなる方法である。ディアローグではないが「悪魔の陽の下に」の第一部「絶望の誘惑」にみられるドニサンと悪魔の戦いは、両者の間の力の関係の逆転が壮烈なドラマとなっている。

「田舎司祭の日記」の田舎司祭のモノログすら、うずくまる教区の相手にしたディアローグとなっている。

これに対し、「新ムーシネット物語」の世界はモノログの世界である。「悪魔の陽の下に」のムーシネットに人間の条件を啓示し、彼女をなお自殺へと追いこむのが、ドニサンとの激しいディアローグであるのに対し、二人目のムーシネットに彼女自身の物語をかきせるのは死者の通夜の番をする老婆のモノログである。だからここには転換の可能性はない。そしてこの小説の主題は、ムーシネットからドラマが奪われる悲劇なのである。

最後の小説作品「ウィーヌ氏」も、その中に含まれるいくつもの対話にもかかわらず本質的にはモノログの世界ではないだろうか。フヌイエの司祭の少年を葬るとき説教が激しい調子で語られ、その内容はこれまでベルナノスの司祭たちが語るうとしたことでありながら、「ウィーヌ氏」の中で、むしろうき上っており、ウィーヌ氏のアンチテイズとなり得ないのは、それが説教というかたちをとっており、しかもディアローグになるための相手としての教区が「死せる教区」となったからである。

このことはまた、ベルナノスが直面した現代世界におけるドラマの不可能さをもあらわしている。

おわりに

ベルナノスが塹壕で経験した戦争は、もはや弾がそばをかすめたとおり、敵を眼前にして戦うといったものではなかった。第一線の兵士にとって敵ははつきりしたかたちをとらず、死すら意味をもちえないものだった。一方兵士を送りだした銃後では、いまだに勇ましい戦争物語があり、人々は自分の同胞たちの奮戦ぶりを保証に生活に不安気におくっているのだった。

第一次大戦の帰還兵士はもはやかつての凱旋兵士ではなく、自分たちの失われた生活にこそそこそに戻ろうとし、一方神話を必要としなくなった社会は彼らを当惑気に迎えた。

戦争は全ての過去のこととし、せんざくを中止してひたすら新しい平安を望んだ。「わかろうとするな」「安全第一」が第一次大戦後の標語となり、繁栄期をむかえる。ブルジョワ社会はみずからの不安定を承知しているのでつかの間の平安にしがみつき、あらゆる

動きを封じようとする。

ベルナノスが「悪魔の陽の下に」のムーシェットを登場させたのはこのような時期であった。反抗とはこのような世界で個人に課せられた唯一の現実的に密着した行動であり、あばく行為だった。

彼にとつてあくまで一人一人の魂が問題であり、天上ではなく地上が問題であり、現実と最もかかわりの深い小説という形式を選んだとき、反抗者は現代世界への有効な証人でありえた。彼の作品が今日少しでも意味をもつとしたらこの一兵士としての視点をつらぬいたことにある。彼の司祭もまた一兵卒であり、懸壕の中の一人一人にかかわろうとした。

だが彼がフランスをはなれなければならぬほど事情が悪化したとき、彼の直面したのはこの一兵士の観点がごともなげにふみにじられる有様であり、司祭が体の外で動く心臓のようにはみだした存在となる様相だった。あくまで現代世界の証人（*testimon*）であらうとした彼の筆は、現代を支配しようとする絶望の原理と分裂を「ウィーヌ氏」の中に描いた。

「私は自分の本が、あなた方から出るスキャンダルの続く間だけ—それより寸時たりとも長くなく—続くように願っている。(NANF p. 226)

「ウィーヌ氏」のあと南米から故国のレジスタンス運動に激しい支援を送ったベルナノスは、この運動の中に反抗の精神が再びたちあらわれるのを見るが、ついに自らの小説世界を再び可能にする世界を見出しえなかった。レジスタンスはひとつの個人的解決にすぎなかったし、われわれはいつもそれを承知していた、と占領下のパ

リで過した作家は述べている。フランスをはなれていたベルナノスは、この点を充分に感ずることが難かしく、彼のポレミックな作品はフランスにいる人々を当惑させたようだし、彼自身、開放後のフランスで深い失望を味わうことになる。

窒息したヨーロッパを逃れたとき、ベルナノスの何よりも現実世界をみなもととした小説世界は不可能にならざるをえなかった。

おそらく小説という形式そのものが最も有効な証言となり得る世界と時代の限界を越えることがこのときほど問題となったことはなかったらう。現代小説が直面している問題も、決してこの地点を遠ざかっはいない。(一九六四・一〇)

Bernanos Œuvres romanesques suivies de Dialogues des Carnérites. éd. Pléiade. (JCC : Journal d'un curé de campagne, M. OUIÑE : Monsieur Ouine)
Georges Bernanos : Lettres aux Anglais éd Gallimard
1st éd. (LAA)
Georges Bernanos : Nous autres Français éd. Gallimard 26^e éd. (NANF)